

# 「ホーム・クッキング」

巷に流通する雑誌の種類は二千とも三千ともいわれる。この数には個人誌、同人誌、タウン誌、PR雑誌などのミニコミがどの程度フォローされているのかいらないのか定かではないが、とにかく最近の雑誌の数は非常に多い。大宅文庫には現在およそ六〇〇種類の雑誌が定期的に寄贈されていて、時折ひよいと送られてくる雑誌のなかには、これまで見たことも聞いたこともなかったようなものも多い。なるほど「雑誌の時代」なのだなあ、というのが実感である。

PR雑誌というのは、その名称が示す通り企業や団体がその製品や活動をPRするための雑誌のことである。従ってその内容が限定されてしまうことは当然のことである。自社のPR誌に他社の製品をPRすることはあり得ないわけで、そこにPR誌の限界がある。しかし一方、例えば旅の情報誌に対すタウン誌のようなもので、ある限定された範囲で専門的な豊富な内容をもつものが多いことも事実である。今や日本の企業の技術、情報力はすばらしく、自然、PR雑誌にもそれは反映して行く。PR雑誌もまた「情報の宝庫」なのである。

前置きが長くなったが、さて今回はキッコマンのPR雑誌『ホームクッキング』を紹介しよう。A5判、オモテ・ウラ表紙あわせて32ページの月刊誌で、

内容はタイトルの通り「ホームクッキング」、つまり家庭料理、である。おいしい料理をいかに作るか、キレイに飾るか、楽しく食べるか、食生活に付随するさまざまな情報を折り込んでなかなかシャレた感じでまとまっている。

クッキングブックと違って、もちろん料理の作り方も大切だが、料理雑誌に求められるのは、そのメンタルな部分をいかに紹介していくかということだと思ふ。その意味でも、例えば、料理を盛る器に作る人の「思い」を語った「一皿のエスプリ」、男の料理編「パパのエプロン」、テレビではわからない裏話や、川津祐介の食べものに対するエピソードなどを綴った「川津祐介のくいしん坊ノ天才」は好企画である。大橋正の表紙がまた、なかなかいい。余白の白を充分に生かしたシンプルなデザインは清潔感があって、いかにも料理の雑誌にふさわしい感じがする。食生活を「豊か」にしてくれる雑誌である(頒価百円。お問合せはキッコマン・広報部)

## 最近雑誌事情

(Y・U)

# コンピュータ雑誌

「パソコンは恐くない」「コンピュータはすでに日常である」この二点を理解することが「情報処理社会」を生みぬく基本となる。機械を生み出したのは人間だし、それを使いこなすのも人間じゃないか。どうってことはないさ。と、無理やり自らを納得させ、ベータブックとやらを勉強し、キーボードの前に座る。コンピュータを自在に操れるか、あるいは、ハードな壁にぶつかり「コンピュータ棄民」となって落ちて行くのかと不安にかられつつ……。

この様な感覚は、すでに古くさいものになりつつあるようだ。マイコンゲーム、ワープロ、コンピュータ・グラフィックなどはもう日常的カルチャーとして存在している。そして、コンピュータ雑誌が専門家や一部マニアだけを対象にする時代も終りつつあるのである。

現在コンピュータ雑誌は、好調な売れ行きである。最近創刊されたものも多く、発行部数十五万部以上のものもある。専門雑誌としては、かなりの市場となってきた。代表的なものは「ASCII」(アスキー)、「OH/PC」(日本ソフトバンク)、「POP COM」(小学館)、「コンピュータソフト情報」(ソフト情報)、「マイコン BASICマガジン」(電波新聞社)、「日経パソコン」(日経マگزロウヒル

社)「コンピュータピア」(コンピュータ・エージ社)などであるが、まだまだ数多くの実力雑誌が控えている。

コンピュータ雑誌の記事の特色をあげてみると、①新機種を紹介：何しろ次から次へと新機種が登場して行くので、パソコンを買おうにも目移りがして決心がつかず資料代の方が高くつくなんて事になる。しかし、専門雑誌だけあって新機種を徹底的に解剖していて、使いやすさ、欠点をわかりやすく説明している。②ゲーム・ソフトの開発、紹介：マイコンが急速に一般化した理由のひとつは、シュミレーションゲームのおもしろさにある。それは自分でオリジナルゲームを組み立てる楽しみと、マイコン少年を一夜にして「ゲーム・ソフト成金」として世に出す魔術などである。遊びながら発明をしていく現代のエジソンたちをベンチャー企業は、けっしてほおってはおかない。マイコン雑誌は、ゲーム・ソフト業界の開発と営業の両方を担当しているのだ。③プログラミング表：数字と記号と欧文の世界。無味乾燥の中にあらゆる可能性の出発点となるべきパワーが潜んでいる。その「機能」を呼び出すのは読者なのである。

コンピュータの利用の手引きとして生まれたコンピュータ雑誌が、コンピュータと創造性を結びつける重要な役割へと変わりつつある。コンピュータ文明への入口で、この雑誌の未来がますます注目されていくことだろう。(H・K)